19世紀ドイツにおける合唱と共同体意識

Chorus and Community Consciousness in 19th-Century Germany

宮本 直美

MIYAMOTO Naomi

This paper examines the relationship between chorus and community consciousness through an analysis of choral movements in 19th-century Germany. The first polyphonic form consisting of male and female voices created a community consciousness based on cooperation with others. But polyphony exists in tension with a simultaneous utterance of different melodies, and moves towards a stabler form. This form was included in unison choral movements derived from polyphonic choral movements. Unison chorus brings about a consciousness of homogeneity. From this derivation of unison, we can understand the German society as being oriented towards a ‘Volksgemeinschaft’ — a purely homogeneous community.

はじめに

合唱、すなわち複数の人間が声を合わせて同一の歌を歌うという行為が、その集団の凝集性を高めることに寄与するであろうことは、おそらく誰にとっても特に違和感を覚えずに受け入れられる主張であろう。祭りのような場面において合唱が伴われることは、古今東西を問わない普遍的な現象とも言え、その意味では合唱が持つこの機能はきわめて一般的でことさらに強調すべきことではないようにも思われる。しかしながら、合唱が実践されるときに高められる集団の凝集性、そこに形づくられる共同体の型は決して一様なものではないのであって、合唱の全般的な機能について考察するだけでは、漠然とした共同体形成という以上の知見は得られない。この知見を一步先に進めるものとしては唱歌などの研究があるが、そこで一般的に行われていることはむしろ歌詞（国語）に注目した分析であって、したがって歌唱であるがゆえの機能が積極的に述べられることはほとんどない。それに対して本論文では、ある特定の文脈に置かれている合唱の独自の形態を見てゆくことによって、そこから浮かび上がる共同体との関係を考察するが、これは同時に合唱から、さらに言えば音楽から社会を見る新たな視角の可能性を探る試みともなる。

本論文で対象とするのは19世紀前半にドイツにおいて見られた合唱である。この時期のドイツでは、都市部の市民層を中心的な担い手として急速に合唱活動が起こり、それはドイツ各地で広く展開されることとなった。しかしこの市民的共同体は、それ自体のうちに、後に民族共同体と呼ばれることになる共同体意識を招く可能性を秘めていた。歴史学において事後的に確認されているこの経緯を、ここでは再びなぞるのではなく、合唱の形態の力学の中にその必然性を見出そう。音楽史においてこの現象は「合唱運動」として一応の認知を得てはいるが、アマチュアの活動であるうえに、「偉大な作曲家」とその作品と直接に関わるものではなかったため、重要な出来事とは見なされていない。ここに付随する音楽学・音楽史上の問題についてはここでは立ち入らないが、この現象の社会的重要性を確認するためにも、その具体的な活動内容から順を追って述べよう。

1. 合唱協会の活動

合唱運動とは教養理念に基づいて市民層が実践した様々な文化活動の一つであった⁽¹⁾。これは19世紀においてヨーロッパ中で見られ、特にドイツで盛んに繰り広げられた音楽活動である。具体的にはこの活動は、合唱を実践するために定期的に集まることを目的とするクラブ的な団体を通して育まれたのだが、合唱に限らず、18世紀末以降のドイツにおいては文学的、芸術的、学術的目的を持つ団体が数多く設立されていた⁽²⁾。それらの一連の活動はフェアアインVerein（協会）活動と総称されるものであり、都市部の市民たちが様々な目的・関心に基づいて形成していたこの自発的集団については、特にドイツの社会史家による業績に詳細で専門的な研究が出ているが、その結果、「フェアアインは三月革命前の時期のドイツ史において周縁的な現象であったのではなく、経済的、社会的、政治的变化において中心的役割を果たした」[Hardtwig,1984:19] ことが一般に認められるようになった。

音楽史記述の側から言えば、19世紀に市民が聴衆として参加するようになったことで現在の音楽会形態が確立したということばかりが強調されているが、当時の社会史的事実に目を向ければ、実際には市民たちは単に聴き役として存在していただけではなく、積極的に演奏活動を行っていたことが分かる。もちろんそれは職業音楽家としてではなかったが、彼らアマチュアによる多様な音楽会は音楽活動全体を活性化させていた[Salmen,1988]。そもそも当時のドイツにおいてはプロによる音楽活動とアマチュアのそれとは、現在考えられているほど厳密に区別されるべきものではなかったことを念頭に置いておく必要がある⁽³⁾。

音楽史上の一般的な認識に従って言えば、19世紀初頭の音楽活動は、経済的・時間的な余裕を持ち始めた都市の市民が、旧体制下では王侯貴族のものであった芸術活動に手を伸ばすようになったという前提に基づいて語られるものの、すでに18世紀以前から、親密な人々との社交のために富裕な家庭のサロンで小規模な音楽会が催されていたこと、また教会における会衆としての歌唱参加が行われていた慣習からすれば、市民層の集会に音楽が取り込まれたことはむしろ必然的なことであるが、19世紀以降、市民たちは音楽を‘フェアアイン’活動として新たな方法で実践するようになった。その中で筆頭に挙げられるのが合唱活動である。それ以外の音楽の協会も設立されていたとはいえ、数の上でそれらを凌駕し、より重要な社会現象となったのは合唱協会活動なのである。もっとも、彼らにとって合唱というジャンルが身近にあったことは疑うべくもない。合唱活動に際しては高額な楽器の購入も、器楽のような特別な演奏技術も必要とされなかったのである。そうした合唱活動が、実際には歌っていた曲種には差こそあれ、市民のエリート層ばかりではなく、下層市民にまで普及した[Mahling, 1966:197; Raynor, 1975=1990:177; Salmen, 1988=1994:70] のは当然のことと考えられよう。各地で設立された団体の歴史研究にはドイツの地元の都市研究がその勢力を見せている。当時無数に創設された合唱団のそれぞれについて網羅的に調査をすることは不可能であるが、1864年の『ドイツ合唱年鑑Taschenbuch für Deutsche Sänger』によれば、ベルリンのみに限定しても、混声・男声合唱団を合わせたその数は89を下らなかった[Mahling, 1980:107]。しかし現段階で重要なことは、このような数多くの合唱団を逐一調査することよりも、むしろそうした合唱団体の基本的な性格をその代表例から引き出すことであろう。

こうした合唱協会の具体的な性格を把握するために、ここではその実例としてベルリン・ジングアカデミーというフェアアインを取り上げる。というのもこの団体は最初の重要な合唱協会であり、その規模や影響力から言っても、後の合唱運動において模範的・指導的役割を果たしたからである⁽⁴⁾。この団体と同様の目的および性格を持つ合唱協会はドイツ中で設立された [Söhngen, 1978:43]。この協会はベルリン宮廷の第一チェンバロ奏者を務めていたファッシュ Carl Friedrich Fasch (1736-1800) の私的サークル活動から始まったものだが、団体の特徴を探るには、1791年の創立年から25年遅れて定められたものであるにせよ、その間の組織的整備の結果として捉えられる規約を検討することが適切であろう。1816年に監督および理事たちによって作成された最初の規約⁽⁵⁾において明文化されている内容のうち、重要なものは以下の事柄である。すなわち、この団体の目的（第1条：神聖かつ厳粛な音楽への志向およびその実践による会員の教化）、入会資格（第2条：特性および音楽的素養）、入会方法（第3条：紹介システムとオーディション）、会員証の発行と会費（第5条）、活動日（第8条）、監督の権域（第9条）、理事の機能（第11条～第14条）である。合唱協会の性質を、成文化された会則から導き出すならば、それは人々が一つの理念のもとに自発的に集まって定期的会合を重ねる場であったと言える。協会一般にそれぞれ設けられていた、労働、世界観、個人の教養、そして文化の発展などに関するフェアアインの‘観念的な目的 ideelle Zwecke’ は、1800年から1848年の間のフェアアイン活動にとって決定的な推進力であった [Hardtwig, 1984:13]。そこに集うのは、居住地域に根ざし、さらに同じ価値観、趣味によって自発的に結びつく人々である。その関係の基盤は何らかの設定された目標にあるのであって、そのためにこそ会の目的が成文化され、常に念頭に置くべき理念として会員間で確認されるのである。会員を統合するこの共通目標の対極にあたるものとして、会則には団体の排他性を示す規則もまた盛り込まれている。それは新規入会に際しての複雑な審査手続きに表れているのだが、入会のためには、既会員の紹介が必要とされ、さらに団体の責任者の審査と許可を経なければならないというものである。結果として承認される新会員は会員の知人や親類であり、全くの見知らぬ人物ではない。このようなシステムによってこうした団体は作為的に会員の同質性を確保していたことになるが、そうした周到な前提のうえで、彼らは余暇に定期的な会合を持つことによって一つの共同体を形づくっていたのである。さらに監督や理事は会員の選挙によって決められることも協会一般の特徴をなしている。そこには私的な団体ながら承認のシステムが導入されていることになるわけだが、つまり協会の代表者は会員の総意によって選ばれるものであり、そして会員の総意を代表して入会審査や運営・財政上の取り決めを行なう責務を負っていたのである。

こうした協会は都市の市民独自の生活スタイルを示す重要な指標である。このような形で会員の同質性を確保する仕組みは、しばしば排他性の指摘を招いてはいるものの、しかしそれを前提としたうえで、彼らは余暇に定期的な会合を持つことによって一つの共同体を形づくっていたのである。ハルトヴィヒはフェアアイン活動の研究において、この自発的共同体が新たな共同生活の型を拓いたと述べている [Hardtwig, 1984:39]。

合唱協会のこのような機制的側面の性質を見てみると、必然的に、フェアアイン活動を検討してハーバーマスが提示した公共圏カテゴリーが想起されるが、合唱協会もまた、彼がそのカテゴリーを立ち上げたところのフェアアイン、正確には「文芸的公共圏」と呼ん

だフェアアインに近似した性格を有していたことが分かる。特にそう言えるのは、そこには会員の合意形成と承認の手続きが採用されているという点である。彼自身が音楽界について想定しているのは批評に関するものであり、確かに合唱協会は歌うことにその会合の理由を持つものであって議論することを主目的とするものではない。しかし特に理事会という場においては、そのような手順を踏まなければならなかったし、合唱を実践する場面でも一つの作品を仕上げる道のりにおいて、技術的および美的方針について合意を目指すことはむしろ不可避的であると言ったほうがよい。ベルリン・ジングアカデミーでは一つの作品に対して数ヶ月の練習期間が設けられていたが [Blumner,1891:32]、この期間の長さは歌唱自体に対する議論、反省点や改良点についての意見交換が繰り返されていたことを示している。つまりその会合は演奏のための批評を行なう機能を併せ持つものだったと言えるのである。

もっとも、筆者の意図は合唱協会を厳密に「文芸的公共圏」と同定することにあるのではない。そうではなく、むしろ彼が政治的公共圏の前段階としてのみその意義を認めている「文芸的公共圏」を生み出していたフェアアインの実際の活動の意味を、異なる方向に見出すことにある。ハーバーマスのように直接の政治的なインパクトに照準した公共性の議論を展開する限り、議論形態としては、「文芸的」なものは「政治的公共圏」を生み出す素地、あるいは「論議の練習場」[Habermas,1962→1990=1994:48]としての副次的な役割にとどまるほかはない。従ってここでは文芸的な関心に基づいた意見交換の場という意味での文芸的公共圏をあえてハーバーマスの議論展開からはずらして、あるいは解放して、文芸的な活動の側の独自の意味を探ってみたい。その際、彼の文芸的公共圏モデル自体からは離れずに、かつそこから異なる方向性を考える可能性を持っていると思われるのが、ここで取り上げている合唱協会活動なのである。それを明らかにするためにも、次に合唱協会の内的な機能を公共圏モデルに寄り添わせつつ考察してみよう。

2. 多声合唱の機能

合唱協会の内的な機能とは、先に述べたようなフェアアインの組織面における社会的事実の考察に対して、合唱自体の機能を探求することを意味している。19世紀前半の合唱運動において特徴的だったのは、それが混声の多声合唱を実践する活動だったことである。これは音楽史上初めて成立したジャンルであった。というのも、それまでは多声合唱とは教会の聖歌隊の占有物で、つまり女性はそこに参加することはできなかったからである。その意味ではこの現象はジェンダーの視点を要するものであるが、ここではひとまず、混声ということよりも多声ということに注目したい。

多声合唱は合唱の中でも、演奏までに練習を必要とすることがその特異性であると言える。つまり、斉唱であれば簡単な曲をその場で歌うということが考えられるのに対して、多声合唱は専門的な教育を受けた歌い手が初見で自分の声部を歌えるという場合を除いては、自分が担当する声部の旋律を練習によって事前に知っておくことが前提となるのである。この必然的に要請される練習が合唱協会の会合で行われていたわけだが、この練習には、声部ごとの別個の練習が求められる。ベルリン・ジングアカデミーでは毎週火曜日を通し稽古の日と定め、月曜日を部分的な個別の練習日としていたが [Blumner,1891:10]、まずは同じ声部担当者どうしでその旋律を習得し、かつその声部全体の響きを調和的なも

のになるよう練習が重ねられるのである。そして同一声部で一応の完成まで辿り着くと、今度は異なる声部と合わせるために同様の練習過程を経なければならない。声部ごとに旋律が異なるとはいえ、曲全体を全うするために目指されるのは調和である。そもそも声を和する行為自体には「同一の気分の共有」[Mahling, 1966:192]という機能が指摘されるが、しかしながらこのように練習を重ねる合唱体験がもたらしめているのは、単に気分の共有にとどまるものではない。というのもそれは歌うという個人的な行為を、あるいはまたそれが有する気分を、単に寄せ集めた総和ではないからである。声部ごとに行われる練習の、そしてまた異なる声部を合わせる練習の過程を考えると、そこにはあらかじめ共有された気分はないといってよく、むしろ最初は調和しない思い思いの歌唱の響きを徐々に参加者の努力によって一つの方向に合わせてゆくという、地道な合意形成過程こそが認められる。つまり、作品を仕上げるために言語を用いての実際の議論が行われるだけではなく、このような合唱体験自体にも合意への過程を跡付けることができるのである。

このような事前の練習によるエラボレーションの必要性を多声合唱の特性として述べたが、もう一つの特性は文字どおりの多声性にある。声部ごとに折り合いをつけられた響きを和するとはすなわち、自分の担当している声部とは異なる響きを聴く、そして聴きながらそこに自らの体得した響きを付加し、それらを合わせて聴く、という行為にはかならない。異なる声部は互いに自由な音楽表現を主張して激しく競合するのではなく、一つの作品を仕上げるという共通の志向性のもとに歩調を合わせ、むしろ理性的・禁欲的に協働する。それは声部ごとに異なる役割を担いながら一つのもを作り上げる作業である。つまりそれぞれが異なる役割で参加し、その差異を維持し続け、それと協調しながら一つの調和的な全体が実現されるという意味で、多声合唱とは他者との協同を成立させるものなのである。他者との協同を意識させ続けるものは常に聴いている他声部の響きであるが、その他者の存在はまた、自己の声部の存在をも常に意識させ続ける。というのも、他声部を聴きながら自己の声部を維持するには自覚的な努力が必要だからである。そうであるなら、他者との協調を実感させる多声合唱とはまた、自己の位置を確認することのできる形態だと言うことができる。この形態の合唱体験がもたらす共同体意識とは自他の協同を保持しての連帯意識なのであり、その意識を合唱という独特の体験が参加者に強く実感させるのである。

こうしてみると、19世紀前半の合唱運動に特徴的だった多声合唱という形態は、それ自体、公衆として集合した私人たちの生活圏としての市民的公共圏 [Habermas, 1962→1990=1994:46] モデルに相似したものであると言える。確かに、文芸的なそれは具体的な対抗相手を置かないがゆえに「それ自身の内部で旋回する公共の議論の練習場」[Habermas, 1962→1990=1994:48] であったかもしれないが、しかしそれによって文芸的な活動自体が自己完結的なものであったと見なすとすれば、それは芸術の自律性という神話を信仰する近代美学の考え方とそう遠くはなくなってしまう。自己完結性とは、その内実がいかに芸術的ないし精神的に豊かであったかを力説しようとも、社会的には重要ではなかったという指摘を甘受することにつながる。しかしながら、閉鎖的な措置を取っていたフェアイン組織、そして直接的な‘敵’を持たない合意形成、という点ゆえに自己完結的に見える合唱活動の意味は、その内部に終始するものではなかったと筆者は考えている。

作為的な同質性確保を前提としたフェアインにおいて多声合唱を実践することによって、その内部には前述したような共同体意識の成立可能性を見出すことができるが、閉鎖

性を温存する現実的な境界は、異なる地域の諸合唱団の連合による音楽祭が設けられることによって超えられていた。合唱団にとっては日頃の練習の成果を発表する重要な場であった音楽祭での合唱体験によって、協会内に限定されていた共同体意識はより広い範囲の共同体イメージへと転換する。通常で数百人、時には1000人にも及んだ多声の大合唱はこの時期に特徴的な現象であった。そこでは一つの事業を見知らぬ人々と共にそれぞれの役割で達成しようという実感が増幅されるのであり、それはその共同体を言わば‘顕在化’させる体験なのである。

こうした合唱協会活動は、定期的な練習の積み重ねと非日常的な祭典とを通して、共同体意識を、身体化させ、実感させる機能を果たしていたと言える。それは参加者の対等性、主体性、他者との協同および連帯といった理念を表象する形態なのであり、その意味で市民的公共性とも呼びうるものであるが、合唱によって逃れられない形で参加者に実感をもたらすがゆえに、一つの理想的なコミュニケーション形態を‘実現’させるかのような、あるいはその実現を予感させるような体験であった。それは特に女声／女性の位置について考えるときに端的に理解できる。多声合唱の実践における限り、女声は男声とまったく対等の位置を獲得することができていた。概念的に理解させるというよりもそれを当事者に実体験させるという点において、こうした合唱の機能は、市民的公共性といった分析のためのカテゴリーの妥当性をさしあたっては補強するものとも言えるかもしれない。もちろん理念型や分析カテゴリーには必ずしも典型的な実体の存在を確認する必要はなかろうが、しかしながら、合唱の体験にはそうしたものを理想的な空間として、仮想的に実現させる機能があったという可能性は指摘しておくべきであろう。それによってもまた分析カテゴリーはその有効性を得ることができるのである。しかし注意しておかなければならないのは、それは理想を理想のまま確保しうる特殊な空間であったということであり、ここでの‘実現’は現実社会における実現とは決して言えないということである。

3. 斉唱形態の派生

しかし、この擬制的共同体の空間はまた、ある種の緊張のうえに成り立っていたことを述べておかなければならない。その緊張はその多声性にはじめから潜んでいた。すなわち、多声合唱の実践とは他者たる他声部の響きを聴くと共に自己を確認しうる形態のものであったわけだが、しかしそれは言い換えれば、その差異を意識的に維持し続ける努力を要請するものでもある。声部ごとの入念な練習を積むのは、他声部の旋律に飲み込まれないようにするためであって、異なる声部を合わせるといことはそれほどに困難を伴う不安定なものであるということである。指定されたキーや弦に手の力を加えれば基本的に楽譜通りの音を出してくれる楽器とは異なり、歌唱における音高と音価の維持は完全な自己制御を必要とする。その自制力を得たうえではじめて成り立つ多声合唱は、その人為性のゆえに常に緊張をはらんだ響きだということになろう。理性的に主体的自己を確認するこのような合唱が持つ緊張は、それゆえにその不安定な状態からより安定した状態へと向かう力を持っている。それを示しているのが、ジングアカデミーの内部から派生したリーダーターフェルである。これは1809年にベルリン・ジングアカデミーの監督ツェルターCarl Friedrich Zelter (1758-1832) がその会員を集めて発足した定員25人の男声合唱団であり、ターフェルというその名が示す通り、会食を伴って合唱を行う協会である [Nitsche, 1980]。

この協会活動に見られた一つの特徴は、基本的にある作品の練習を重ねることによって完成させるといふよりは、その場で合唱し、それを楽しむという性質であり、それはジグザアカデミーの練習日が毎週設けられていたのに対し、リーダーターフェルの会合が月1回であったからも窺えることである。ここに始まる男声合唱運動は、間もなくその会員層を多声合唱協会の場合よりも下方に拡大しながら急速に発展し、19世紀後半以降に全盛期を迎えた。そこで実践されたのは練習を必要とする多声合唱ではなく、むしろ単声、すなわち斉唱を主としていた。モッセが『大衆の国民化』[Mosse, 1975] で取り上げている男声合唱がそれであり、この運動はVolksfest⁽⁶⁾という数万人規模の祭典において重要な位置を占めることとなったのである。19世紀前半にむしろ全盛期を迎えたと言える多声合唱運動は、周縁的な位置づけであるにせよ、ドイツ音楽史でのみ認知されているのに対して、男声合唱運動はドイツの社会史においてのみその重要性を確認されているというように、これまでのところ両者は担当する学問分野を違えており、その接点というものは見出されていないのだが、両者は別個のものではなく、必然的にその形態を変えてはいるものの連続した合唱運動と見なして分析するのが筆者の独自の立場である。ここで何よりも重視したのは当初、紛れもなく重複した担い手の中から異なる合唱形態が派生したという事実である。その出現にはすでに緊張と不安定さを宿命的に持つ多声合唱から、より安定した形態である斉唱への内在的要求が表されている。

斉唱、すなわち同一声部による合唱においては多声合唱の場合に比して匿名性が増している。そこに響く声は自身の声であると同時に他者の声でもあり、その合唱の実践において差異は実感されない。この合唱運動に一般的だったように数千人もの大合唱となった場合などは自他の声の区別は不可能に近いとさえ言える。そこでの合唱はまさに声の総和と言ってよいものであり、唯一共通の役割で参加する歌い手の差異のない一体感が全体を支えるのである。斉唱とはその参加者が発声を共にする限り自己がその中に属していることを知り得るが、その位置は確定できないような合唱であると言えよう。男声合唱団もまた、祭典においては複数の協会が連合していたのだが、そこでの合唱の効果は多くの見知らぬ人々との連帯意識の鼓舞であり、拡大された共同体の実感である。ここでイメージされる共同体とは、そこでは女声が排除されていることから言えるのだが、その成員に差異がないもの、あるいはまたそれを認めないものであり、そしてそれは存在していたはずの主体的な自己がその中に融合して希薄になったところに成立するものなのである。

自己を努めて意識的に維持しなければならない多声合唱に対して、万人に同一の役割を期する斉唱はその安定性に力を持っていたのだが、そのような多声合唱の危うい緊張こそが、ユニゾンの運動を生み出したと考えることができる。すなわち多声合唱活動に認められた市民的公共性は、そこに内包される緊張ゆえに、その空間だけを維持し続けることができずに、その内部から崩れる可能性を秘めていたと言い換えられよう。

4. 結論

このように、多声合唱運動から斉唱運動が生み出された現象からも、市民的共同体意識からより普遍的で単一の共同体意識を志向してゆくドイツ社会を検討する可能性が開かれる。すなわち、多声合唱の実践においては差異を許容しつつ、かつ主体的に参加して合意への過程を歩むという‘理想’の実現が実感されていたのに対して、斉唱の体験が実感さ

せるのは、差異が‘消滅’したかのような共同体であった。それは自己がその共同体に同一化しているものであり、そこにある人々はすべて同じであるかのような集団の形態、すなわち対等性ではなく同一性の共同体である。その実感によって、むしろ存在していたはずの差異は隠蔽される。そしてまた、多声合唱における共同体は時間と努力を重ねて築き上げてゆくものであったと考えるならば、斉唱におけるそれは、そうした努力をせずとも、また時間をかけなくとも、「同一」であることが感じられるものである。つまり、単純な歌曲を合唱することはその場で可能であることが、すなわちその共同体はいつでもどこでも成立しうる、あるいは成立しているという、言わば潜在的な同胞意識こそが実感されるのである。あたかもその共同体をなすことは参加者たちにとって「自然」であたりまえのことであるかのようなのである。斉唱の派生という現象からは、主体的な自己の確立・維持によって成り立つ共同体よりも、説明や理由を不要とする自明の共同体とそこへの帰属意識が実感され要請されたことが読み取れる。つまりより‘原初的’な共同体のイメージの生成である。自己の存在が希薄化したこのような共同体はそこでVolkという共同体名を強力に招き寄せることになるのではないだろうか。それは言うまでもなく、ファシズムにおいて求められる共同体像と同型のものであり、この合唱運動の展開が興味深く示唆しているのは、理想的なものとして措定されることすらある市民的公共圏が、それ自体の内部に、同質的な共同体へ向かう可能性を孕んでいたということである。

こうした共同体の型が合唱形態に反映されているというのではなく、盛んに行われたその自発的な活動が人々に実感をもたらし、熱狂さえ生み出していたことに、合唱運動の積極的な意義がある。つまり合唱自体に本来不可分に備わっている漠たる共同性は、ある形態の合唱の実践を通して、より具体的な型の共同体へとその像を結ぶことになる。そこから、合唱の実践による共同体イメージの実感が、理念的なそれを意識化させるという可能性を指摘することができるのである。直接の政治運動ではなくとも、この体験は「想像の共同体」を実在するものであるかのように実感させることに寄与し、あるいはモッセが「大衆の国民化は自らの熱狂に基づいていなければならない」[Mosse,1975=1994:4]と言うときの、その熱狂を生み出すことに本質的な役割を果たしていたのである。

註

- (1) 教養Bildungとは、18世紀末から19世紀にかけてのドイツ市民社会を考察するうえで欠かせない理念である。それは知識というよりはむしろ、人格形成と道徳教育を結び付けた概念であり、特に新人文主義の教養理念は人間の持つ個性の開花ないし啓発を目指すものであって、「『内面的』に自己発展していく人格性」[Riedel, 1979=1990:169]であったということが、教養および教養市民層の研究において一般に認められている。当時のドイツにおいては、この理念を掲げた様々な文化活動が繰り広げられた。尚、教養理念とドイツ市民層の問題については拙稿[宮本、1998]を参照。
- (2) 19世紀を生きたベーンの記録によれば、ドイツはこうしたクラブ・協会活動の模範的な国だとと言われる[Boehn, 1911=1993:345]。
- (3) ザルメンは『『愛好家』という概念が『ディレクタント（好事家）』という概念に取って代わられるのは、ようやく1830年を過ぎてのことで、それ以来この『ディレクタント』という呼び方には、プロフェッショナルな要求をもはや満たすことのない専門的能力の欠如というイメージがまわりつく』と述べている[Salmen, 1988=1994:176]。
- (4) ベルリン・ジングアカデミーの音楽史における重要性は、1829年にメンデルスゾーンの指揮のもとで、難易度の高い合唱曲であるJ.S.バッハの《マタイ受難曲》の劇的な再演（蘇演）を行い、それによって19世紀におけるバッハ復興運動に強力な影響を与えたことに認められている。

- (5) 規約は以後1821年、1833年、1860年、1888年、1953年と、幾度にもわたって改訂された。1816年の規約は[Bollert, 1966]に転載されている。本文で紹介したもの以外の内容は、第4条：入会受付期間、第6、7条：退会手続きとその例外、第10条：監督補佐、となっている。
- (6) 後にナチスに採用されて新しい政治形態を生み出すことになったこの民族の祭典は、そもそもヤーンFriedrich Ludwig Jahn (1778-1852) とアルントErnst Moritz Arndt (1769-1860) らの主導によって展開した。彼ら初期の愛国主義者の理念において、祭典はドイツ人・ドイツの歴史および起源・ドイツのキリスト教(敬虔主義)を結びつけるものと考えられており、各種の祭典にはそれらを暗示するいくつかの象徴が必ず持ち込まれていた。本論文で前述した音楽祭も、現在行われているような性格のものではなく、このVolksfestの脈絡の中で捉えなければならない。

文献

- Blumner, Martin, 1891. *Geschichte der Sing-Akademie zu Berlin*. Berlin: Druck und Verlag von Horn & Raasch.
- Bollert, Werner (ed.), 1966. *Sing-Akademie zu Berlin. Festschrift zum 175 jährigen Bestehen*. Berlin: Rembrandt Verlag.
- Habermas, Jürgen, 1962. *Strukturwandel der Öffentlichkeit—Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Neuwied: Luchterhand. → 1990=1994 細谷貞雄他訳、『公共性の構造転換』、東京：未来社。
- Hardtwig, Wolfgang, 1984 “Strukturmerkmale und Entwicklungstendenzen des Vereinwesens in Deutschland 1789-1848.” In: *Vereinwesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*. Ed.by Otto Dann, München: Oldenbourg Verlag, pp.11-50. (Historische Zeitschrift, Beiheft 9.)
- Mahling, Christoph Helmut, 1966. “Zur Soziologie des Chorwesens.” In *Zum 70. Geburtstag von Joseph Müller-Blattau*. Kassel, pp.192-200.
- Mahling, Christoph Helmut, 1980. “Zum Musikbetrieb” Berlins und seinen Institutionen in der ersten Hälfte des 19.Jahrhunderts.” In *Studien zur Musikgeschichte Berlins im frühen 19.Jahrhundert*. Ed.by C.Dahlhaus, Regensburg: Gustav Bosse Verlag, pp.27-284.
- 宮本直美、1998 「教養理念とドイツ市民層の再検討—教養と市民層および国家—」、『ソシオロギス』第22号所収、ソシオロギス編集委員会。
- Mosse, George L., 1975. *The Nationalization of Masses. Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*. New York: Cornell University Press. = 1994 佐藤卓己他訳、『大衆の国民化』、東京：柏書房。
- Nitsche, Peter, 1980. “Die Liedertafel im System der Zelterschen Gründungen.” In: *Studien zur Musikgeschichte Berlins im frühen 19.Jahrhundert*. Ed.by C.Dahlhaus, Regensburg: Gustav Bosse Verlag, pp.11-26.
- Raynor, Henry, 1975. *Music and Society. Since 1815*. New York: A Crescendo Book Taplinger Publishing Co.. =1990 城戸朋子訳、『音楽と社会』、東京：音楽之友社。
- Riedel, Manfred, 1979. “Bürger” in: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*. Stuttgart: Ernst Klett Verlage GmbH u. Co.KG. =1990 河上倫逸他編訳、『市民社会の概念史』所収、東京：以文社。
- Salmen, Walter, 1988. *Das Konzert*. München: C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung. =1994 上尾信也他訳、『コンサートの文化史』、東京：柏書房。
- Söhngen, Oskar, 1978 “Theologische, geistes- und musikgeschichtliche Voraussetzungen der Entstehung der außerliturgisch religiösen Musik im 19.Jahrhundert.” In: *Religiöse Musik in nicht-liturgischen Werken von Beethoven bis Reger*. Ed.by W.Wiora, Regensburg: Gustav Bosse Verlag, pp.19-45.
- 渡辺裕、1989 『聴衆の誕生』、東京：春秋社。

(東京大学大学院人文社会系研究科社会学専攻、博士課程在学中)